

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00618

研究課題名(和文) コーパスに基づく「とりたて」論の再構築

研究課題名(英文) Towards the Reconstruction of "toritate" Research: A Corpus-Based Approach

研究代表者

茂木 俊伸(MOGI, Toshinobu)

熊本大学・大学院人文社会科学部(文)・准教授

研究者番号：20392540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、現代日本語の「とりたて」表現の新たな体系を構築することを目的としたものである。

その主たる成果として、1) 従来の「とりたて」表現の体系を再確認したうえで、その周辺部に存在する多様な類義の表現を収集・整理し、いくつかの事例について具体的な分析を行ったこと、そして、2) それらの体系化を試みたこと、を挙げることができる。また、とりたて表現に関する文献目録を増補・公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、現代日本語文法研究の主要なトピックの一つである「とりたて」について、従来の分析の中心であった助詞と副詞の“周辺”から“外側”の領域を開拓することで、「とりたて」論の範囲の拡大の可能性を検討することを目的としたものである。

書き言葉データに基づいて「とりたて」表現と見なしうる語や表現を探索的に収集・分析し、その体系化を試みたが、この結果からは、「とりたて」論の射程の新たな広がりを確認するとともに、日本語以外の言語との対照研究等に対する示唆を得ることができる。また、ウェブ公開している文献目録は、日本語学発の「とりたて」研究の基本インフラとして位置付けられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to develop a new system of "toritate" expressions in modern Japanese.

The main achievements of this project are: 1) collection and organization of various analogous expressions existing in the periphery of conventional "toretate" expressions, and analysis of some examples; and 2) attempted systematization of these expressions.

In addition, the project has expanded and web-published a bibliography on "toretate" expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：とりたて 取り立て 副助詞 係助詞 副詞 複合助詞 接尾辞

1. 研究開始当初の背景

本研究課題が検討の対象とする「とりたて」は、主として「だけ」「も」「さえ」「しか」といった助詞類(とりたて助詞, とりたて詞)が表す意味・機能を表す用語であり、現在では現代日本語文法研究の中心的テーマの一つとなっている。

一方で、従来の「とりたて」研究には、その多くが助詞類を対象としているという大きな研究対象の偏りがあった。「とりたて」が助詞や副詞に伴われる、範疇横断的な意味・機能であるならば、さらにこれらのカテゴリーを超えた検討が必要になるはずである。

これまでのとりたて研究において“周辺”的位置に置かれていた、あるいは類似の働きを持つのに気付かれていなかった多様な表現を具体的に収集し、検討することは、「とりたて」の概念の深い理解につながると言える。

以上のことから、「とりたて」研究においては、次のような発想の転換が必要と言える。

〔従来〕 文中に現れる助詞・副詞はどのような「とりたて」の働きを持つのか。

〔今後〕 「とりたて」の働きは、文中のどのような要素によって担われているのか。

このように、助詞・副詞を中心とした狭義「とりたて」論の枠組みから脱却し、いわば広義の「とりたて」表現にどのような形式があるのかを整理すること、そして、それらを包含できる体系化を検討することで、「とりたて」論を再構築することが求められていると言える。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、「とりたて」論の拡大と深化の可能性を追求するために、次の「問い」に答えることである。

- 1) 「とりたて」と呼ばれる働きは、具体的に文中のどのような要素によって、どのような形で担われているのか？
- 2) それらの要素を可能な限り網羅・体系化すると、どのような全体像が描けるか？

まず1)に関しては、探索的研究の形で行うものである。助詞・副詞を「とりたて」論の“中心”とするならば、これ以外の品詞の類義の語や、「語」よりも大きな単位の複合表現などは、その“周辺”や“外側”に位置付けられる。

本研究課題では、このような“周辺”の現象を広く収集し、さらに「とりたて」論の“中心”との関係性も含めて分析する。このような領域を開拓することで、「とりたて」論の範囲を拡大する可能性が検討できる。

次に2)に関しては、1)の結果を俯瞰的な視点からまとめるものである。

本研究で収集した表現の分析を、先行研究の知見と合わせて検討し、「とりたて」表現の全体を体系化した新たなモデル(試案)として示すことを目指す。

3. 研究の方法

本研究が採用したアプローチおよび研究のステップは、次のとおりである。

- A) 先行研究や文型辞典類を用いた文法項目の調査、ならびに『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を用いた探索的研究による、「とりたて」表現と位置付けられうる語・句、およびそれらが関与する複合表現等の網羅的な収集、整理。
- B) 収集した表現の意味・文法的特徴の分析、および狭義「とりたて」表現との関係性の検討。
- C) 上記を踏まえた、広義「とりたて」表現の体系化の試行。

4. 研究成果

本研究課題の主たる研究成果は、当初の目的に沿って、1)従来の「とりたて」表現の“周辺”部に存在する多様な類義の表現を掘り起こし、整理・分析したこと(上記3.のA)およびB)),そして、2)それらの体系化の試案を作成したこと(同3.のC))である。

以下、これら2点ならびに本研究課題の副産物である文献目録について、具体的に報告する。

(なお、活字媒体の業績については具体的に書誌情報を示すこととする。)

(1) 広義「とりたて」表現の収集・分析

本研究では、最初のステップとして、主に文型辞典類を用いた文法項目の調査とともに、コーパスを用いた探索的分析を行うことで、とりたて助詞の意味分類に基づいた、広義「とりたて」表現の候補となりうるさまざまな表現のリストを作成した。

活字化した具体的な一つの分析事例としては、接続表現「だけでなく」がある。この表現は、とりたて助詞を構成要素として含む複合表現であるとともに、周辺に存在するさまざまな類義の共起成分が多様かつ明確であり、これらがとりたて研究の視点から分析の対象となりうることを示すモデル事例となった(2019年12月、招待発表として公表)。これは次の論文として公表した(2021年3月)。

茂木俊伸(2021)「ダケデナク文から見えてくること」、『国語国文学研究』52, pp. 左 1-12, 熊本大学文学部国語国文学会。<URL> <http://hdl.handle.net/2298/00043735>

この他、研究期間中に語法研究として論文化したものとしては、英語のとりたて表現“just”から借用された外来語「ジャスト」の分析がある。

茂木俊伸(2022)「まさにジャスト」、『一語から始める小さな日本語学(仮)』(金澤裕之・山内博之(編)), ひつじ書房, 2022年夏刊行予定

「ジャスト」に関しては、結果としてとりたて表現とは認められないという結論に至ったが、限定表現との違いを明らかにするためには丹念な検討が必要であったことから、今後もさまざまな個別の分析事例の蓄積が必要になると考えられる。

(2) 広義「とりたて」表現の体系化の検討

まず、本研究による「とりたて」表現の体系化の基盤とするために、狭義「とりたて」表現についてこれまで提案されてきた体系を整理した。これは、次の書籍の一章として公表された。

茂木俊伸(2019)「とりたて表現の研究動向」、『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史(編)), くろしお出版, 2019年11月。

次に、(1)で収集した表現について、意味・機能別に分類を行いつつ、検討が必要な部分の洗い出しを行った。例えば、スケール(尺度)が関わる「さえ」類と「こそ」「など」類(およびその共起語)との異同、限定表現と 其他否定 表現との関係などである。

限定表現の体系化(2022年3月、口頭発表として公表)に関しては、上のような異なるラベル間の関係の分析を行ったうえで、品詞別の表現のリストに基づいた体系化を試みた。さらに、狭義「とりたて」表現との異同についても検討した。

このように、これまでの「とりたて」論の“周辺”の領域から検討を重ねていくことで、改めて、「とりたて」とは何か、という根本的な問題が提起された。今回は意味・機能からアプローチしたこの問題の延長には、とりたての「焦点」の概念規定の問題(2019年2月、口頭発表)や、「呼応」を含めた統語論的特徴の問題(2021年12月、口頭発表)があり、これらとの関係を再検討することが今後の課題となる。

(3) 「とりたて」関連研究文献目録の増補

ウェブ版の「とりたて」関連研究文献目録(2012年~作成・管理)を、本研究課題の4年間で増補・改訂した。199編の新たな文献情報を追加し、最終的に2022年1月までの1,174編から成る文献目録となった。

この目録は、本研究課題の遂行の基盤とするだけでなく、「とりたて」研究の活性化にも資することを狙ったものである。2020年と2021年に発行された日本語文法概説書の「とりたて」の項において相次いで紹介されるなど、当該分野を支える一定の役割を果たすことができたと評価できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 茂木 俊伸	4. 巻 52
2. 論文標題 ダケデナク文から見えてくること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語国文学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 「とりたて」焦点論の焦点
3. 学会等名 第8回「とりたて表現」対照研究プロジェクト打ち合わせ会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 「とりたて」論の再構築の視点
3. 学会等名 第15回現代日本語文法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 ダケデナク構文から見えてくること
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 「とりたて」論のまとめりと広がり
3. 学会等名 大東文化大学外国語学会日本語部会言語学勉強会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 とりたて助詞の意味と呼応の問題
3. 学会等名 日本語文法学会第22回大会（パネルセッション「とりたて助詞における評価の態度の再検討」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 茂木 俊伸
2. 発表標題 「とりたて」体系構築の視点
3. 学会等名 第18回現代日本語文法研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野田尚史・茂木俊伸・小柳智一・中西久実子・狩俣繁久・鄭相哲・井上優・峰岸真琴・原真由子・今村泰也・バルデシ、ブラシャント・桐生和幸・岸本秀樹・林徹・米田信子・大澤舞・筒井友弥・デロウ中村弥生・マテラ、ユラ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 360
3. 書名 日本語と世界の言語のとりたて表現	

1. 著者名 金澤裕之・山内博之・岩田一成・橋本直幸・奥野由紀子・加藤恵梨・小口悠紀子・小西円・嶋ちはる・建石始・田中祐輔・中石ゆうこ・中俣尚己・本多由美子・茂木俊伸・森篤嗣・柳田直美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数
3. 書名 一語から始める小さな日本語学（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「とりたて」関連研究文献目録 https://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature/asia/nihonbungaku/tmogi/fp_biblio/index.html

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------